西日本新聞　（明治25年3月26日第3種郵便物認可）　第47600号　（日刊）

熊本地震産期母子医
0人近く、
新生児の受
外搬送を余
かった。同
の中核施設
（NICU
への影響な

胎児の異常
どに24時間対
の砦（とりで）”と呼ば
周産期母子医
が災害で機能
のは全国で初
同病院新生児
瀬昭彦医師は
新築するしか
かかる可能性
受け入れなど

熊本地震

西日本新聞

2016年
5月1日
（日曜日）

明治・大正・昭和
九州の鉄道
おもしろ史
●出版部　書店で好評発売中

SEIWA
土地活用一筋45年
賃貸マンション経営をトータルサポート
イメージキャラクター 松岡修造
せいわのとちかつ で 検索
生和コーポレーション
福岡支社
tel/092-433-4001

	朝 6時~	昼 12時~	夜 18時~	最高	最低	風向	あす	あす最高	あす最低
岡	0	0	0	25	13	↑	20	26	15
九州	0	0	0	26	13	↑	20	26	14
豊	0	0	0	26	12	↑	20	26	13
後	0	0	0	26	12	↑	20	25	14
賀北	0	0	0	25	11	↑	30	25	12
佐賀南	0	0	0	25	13	↓	30	25	14
長崎北	0	0	0	23	13	↗	30	24	14

降水確率　最高/最低気温・風向

水の

以降、熊本県
の枯渇や水道水
認されている。
かな湧き水や
（熊本市中央
知られる「水の
門家は、地震
どが変化した
ている。
に「読み解く
の地下水は、
田畑から地中
阿蘇山の火砕流
られている。
、浄水施設で
きるため、県
%は地下水を
使用している。
や益城町など

公式確

年の節目に
け、償いを求
どと、それぞ
った。【24
熊本学園大
ンター長の花
「被害を地域
認識し、水俣
発表した。

西日本新聞　（第3種郵便物認可）

ブロードウェーでの興奮再び

和太鼓「TAO」

ツアーに先立ち 日田で5日公演

初の米ブロードウェー公演（2月11〜14日）で成功を収めた和太鼓のパフォーマンス集団「TAO」は、5〜6月に熊本を除く九州各県で開催する「凱旋ツアー」に先立ち、5日午後3時から日田市三本松1丁目のパトリア日田でプレビュー公演を開く。

ブロードウェー公演ではストーリー性を重視していたが、今回はばちさばきなど太鼓の演奏そのものに力を注ぐという。前売り券、当日券ともに6千円。問い合わせはTAO文化振興財団＝097(529)8252。

001年、旧湯布院町（由布市）で「由布院空想の森美術館」を運営。民俗仮面や古布と共に、主に江戸時代後期から明治時代に作られた小鹿田焼など九州の古陶磁を収集した。梅原さんは産業廃棄物処理業の傍ら、日田市殿町でギャラリー渓聲館を営み、小鹿田焼などを集めてきた。2人は小鹿田焼の窯元が集まる皿

者約30人と市のゆるキャラ

は前年の2割程度。特に4日の空き室が多いという。通常通り営業している別府の現状をまずは県民に知ってもらおうと、急きょ同駅前での活動を企画した。

協会の持永登茂副会長は「別府が先頭に立っておもてなしをしていけば、県内の他の観光地も続くはず。積極的に元気さをアピールしたい」と話した。

久住発　サンデーコラム

TAO×竹田

文化芸術は街を元気にする！

音楽の根幹に大自然

「DRUM TAO」は、和太鼓の概念にとらわれない、全く新しい舞台芸術の確立を目指して設立したアーティスト集団である。1993年に愛知県で結成。95年には僕の出身地がある九州へ移り、作品づくりの本拠地を求めた。そして2000年、大分県竹田市久住町にて、TAOの里「GRANDIOSO」を構えた。

久住高原の大自然の中で、いつでも大太鼓を打ち鳴らせる申し分ない環境。ここで独自の音楽性や演出方法を見出してきた。TAOの音楽は今や世界22カ国400都市に届け、観客動員数は700万人に迫る。今年2月には、結成当初からの夢であった米ニューヨーク・ブロードウェーで6公演することができた。

TAOの1年は大分で始まり、大分で締めくくられる。正月を大分で迎えた後、2カ月かけて海外ツアー。帰国後は新作舞台制作に入り、九州を皮切りに全国ツアーを行う。年末には「凱旋」と称してiichikoグランシアタでの公演を行っている。

今年3月末、北米ツアーから帰国したメンバーと国内組メンバーの総勢32人がTAOの里に集結。ブロードウェーで大成功を収めたメンバーの顔には、今までにない達成感と誇りがあふれていた。今や2、3班ごとに活動しているTAOのメンバーが全員集うのもここ大分ならではの光景だ。

その感動の余韻に浸る間もなく、翌日にはTAOの里にコシノジュンコさんの姿があった。12年からTAOの衣装を手掛ける彼女は、新作舞台の衣装フィッティングを行うためにツアーメンバーの帰りを待っていたのだ。実際に衣装を着て演奏できるか、アクロバットな動きができるか、演者に衣装を合わせる細かな作業。そのチェックは2日間にわたって入念に行われた。

毎回、僕が演出家として依頼するのはいくつかのキーワードだけ。伝えすぎると新しい発想にふたをすることになるからだ。今回の衣装テーマは「近未来」。狙い通り独創的な数々の衣装デザインができた。もちろん、舞台制作全体にも常に固定概念を打破する発想が欲しい。それが今のTAOをつくっている。

しかし、舞台がどれほど斬新に変化しても、TAOのつくる音楽の根幹には久住の大自然がある。曲を聞けば不思議と風景が浮かんでくるような魅力がある。音楽とはそういうものだ。

TAOの里ではこの時期、太鼓、篠笛、箏、三味線の音、また新たな音…、いつも至る所で音があふれている。新しいものを生み出す作業は想像を絶するほどストイックだ。稽古場はメンバーの奪い合いとなり、作品が出来上がるまでここは眠らない場所となる。

「DRUM TAO」結成23年目の新作舞台は、これまでのイメージを更に一新したものになる。そしてここで生まれたTAOの音楽、舞台は、日本全国、世界を旅して回るのだ。

（タオ・エンターテイメント社長、藤高郁夫）

TAOのメンバーらと話し合う藤高社長（手前右端）。左端は衣装を担当するコシノジュンコさん

ふじたか・いくお　1959年生まれ。熊本県出身。タオ・エンターテイメント代表取締役社長兼演出・芸術監督。外資系商社や大手流通業などを経て、93年TAOを結成。舞台演出、音楽制作などの総指揮を執る。2011年大分県「文化功労者」、13年竹田市「文化創造賞」受賞。